近代日本の職業経歴

—2015 年 SSM 調査分析結果(4)—

関西学院大学　渡邊　勉

1. 目的

本報告は、2015 年 SSM 調査を含むこれまで 7 回おこなわれた SSM 調査のデータを分析することで、1920 年代から 2015 年までの日本の職業経歴の特徴を明らかにする。

1920 年以降の日本社会は、アジア・太平洋戦争を挟んで、戦前と戦後という大きな社会構造の変化があり、また戦後社会においても、混乱期から高度経済成長期、安定成長からバブル崩壊後の停滞期と大きく変化している。その中で、人々の職業経歴がどのように変化してきたのかを検討する。その際、不平等という観点から、移動の安定－不安定化、上昇－下降化に焦点を当てる。

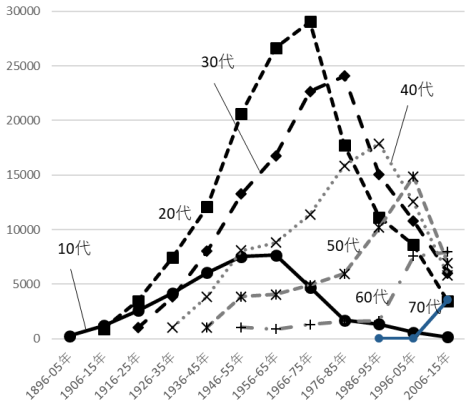

図. 年齢別職歴サンプル数(person-year data)

具体的に本報告では、第一に、1920 年代から 2015 年までの職歴全体の特徴を記述する。第二に、職歴のパターンの変化を記述し、その変化の要因を検討する。

2. データ

1955 年から 2015 年までの SSM 調査の職歴部分の合併データを利用する。男性 18,005 人、女性 11,672 人が対象となる。1886 年から 1995 年生まれ、1896 年から 2015 年までの職歴が含まれている。

3. 分析

第一に、従業先、従業上の地位、仕事の内容、役職の時系列的変化について検討した。その結果、従業先（転職）は男女ともに戦中期に激増する。その後減少するものの、戦後は一貫して増加傾向にある。女性において特にその傾向は強い。従業上の地位については、非正規雇用率が男性は 90 年代以降、女性は 70 年代以降一貫して増加している。仕事の内容についても、SSM 小分類間の移動において、男女ともに高度経済成長以降一貫して移動率が高い。さらに役職については、男性において、80 年代以降、上昇に対して下降の比率が上昇している。

第二に、職歴パターンの分析をコーホート別におこなった。5 つのパターンに分けて分析をおこなった。そのうち、40 歳までの職歴について、仕事も従業先も変化のないパターン（安定型）の比率は、男性については、1906～65 年コーホートまでは変化していないが、66 年以降のコーホートで若干低下している。逆に仕事変化あり・転職ありのパターン（不安定型）は増加している。女性については、1916 年以降のコーホートで一貫して、安定型が減少し不安定型が増加している。さらに、特に男性において安定－不安定型と学歴との関連が強くなっており、高学歴ほど安定型になりやすい。以上から、戦中期を除き、この 100 年間において職業の不安定化が進行し、またそうした不安定化が学歴によって規定させる程度が大きくなっている。

謝辞：本研究は、JSPS 科研費 JS25000001 の助成を受けたものです。